



Title	歌人笛井宏之におけるひらがなの使用：ひらがなの表現効果をめぐって
Author(s)	権田, 彩良
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 27-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102284
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

歌人 笹井宏之におけるひらがなの使用 ——ひらがなの表現効果をめぐって——

権田 彩良

1. はじめに

日本語では厳格な正書法は確立されていないと言われ、なかでもある語をどの文字体系で表記するかという選択は慣習に負うところが大きい¹。創作など文字体系の選択が特に自由な場面では慣習から逸脱した文字体系の選択が散見され、それは日本語では「文字の使い分けによって意思や感情を伝えることが可能」(阿辻 2014: 19) なためである。つまり、ある表現がどの文字体系で書き表されたかということにも書き手の意図が反映されていて、そこでの文字体系の選択にはそれぞれの文字体系に固有の機能やイメージが関わっていると考えられる。

本稿は、現代短歌における文字体系の選択の事例として 笹井宏之による短歌作品を取り上げる。 笹井の短歌作品のうち、「平仮名／ひらがな」という語が用いられた短歌から 笹井のひらがなという文字体系への意識を探り、短歌全体がひらがなで表記された短歌に着目することで、ひらがな表記がもたらす表現効果を考察する。

2. 現代日本語表記の慣習と短歌における文字体系の選択

2.1 現代日本語表記の慣習

個別の短歌を観察し 笹井のひらがなの使用について論じるに先立って、現代日本語表記の慣習や文字体系の選択による表現効果についての先行研究と、短歌において文字体系の選択がどのように扱われているかという実態を概観する。現代日本語表記は漢字かな交じり文を基本としているが、それぞれの語をどの文字体系で表記すべきかという点について明確な基準があるわけではない。慣習的には、自立語の表記には漢字が、付属語の表記にはひらがなが、外来語、擬音語、擬態語、音声の表記にはカタカナが用いられている(野村 2019)。文字体系の選択による表現効果については、ある発話の表記にカタカナを用いることは外国人属性やリテラシーの低さなどを喚起する(金水 2021)ほか、ロボットなど感情移入することが難しい属性をイメージさせること(松田 2021)、ひらがなの多用は幼児や子どもという属性を想起させやすいこと(富樫 2021)など、文字体系と特定の属性の結びつきが指摘されている。

¹ 現代日本語の表記の目安とされている内閣告示には、古いものから順に、「ローマ字のつづり方」(1954年内閣告示第1号)、「送り仮名の付け方」(1973年内閣告示第2号、2010年一部改正)、「現代仮名遣い」(1986年内閣告示第1号、2010年一部改正)、「外来語の表記」(1991年内閣告示第2号)、「常用漢字表」(2010年内閣告示第2号)が挙げられる。「外来語の表記」では外来語をカタカナで表記することが示されているが、それ以外の語をどの文字体系で表記すべきかという点については明示されていない。

2.2 短歌における文字体系の選択

定型詩である短歌では長く韻律が重視されているが、歌集などを読む際、短歌は聴覚だけでなく視覚でも鑑賞される。視覚情報である文字体系の選択も作品の印象や解釈に影響を与えることから、複数の歌人が文字体系の選択による表現効果について言及している。

特にひらがなの選択について、歌人である浜田（1981）と江戸（2020）はそれぞれ、「ひらがな表記の短歌には、そのイメージを拡大して見せる効果が働く」（浜田 1981：33）、「平仮名で詠う部分は言葉の意味が一瞬消える。音となって頭に入ったあと、じわじわと意味を感じてもらえたなら成功」（江戸 2020：44）と述べている。ひらがなは表音文字であり、表語文字である漢字とは異なりひとつひとつの文字が特定の意味をもたないことから、ひらがな表記が作品のイメージを膨らませることが示唆されている。

3. 歌人・笹井宏之について

笹井宏之は、しばしば2000年代の短歌シーンを象徴する存在として扱われる歌人である。笹井は2004年に作歌を開始し、2005年には初めてインターネットのみで作品を募集した短歌の新人賞である歌葉新人賞の第4回受賞者となった。当時はインターネット出身の歌人が敬遠されがちだったなか、笹井は例外的に歌壇で高い評価を受けた。歌人として歌誌に作品を発表するかたわら、本名（筒井宏之）で佐賀新聞にも短歌を投稿し続けた。2008年に第一歌集『ひとさらい』（BookPark）が出版されたが、1年後の2009年に26歳で夭折した。死後、『ひとさらい』（2011）、第二歌集『てんとろり』（2011）、佐賀新聞に掲載された251首に新たに発見された短歌を加えた『八月のフルート奏者』（2013）が書肆侃侃房より刊行された。笹井の短歌は、歌人の瀬戸夏子によって「東直子²の口語のやわらかさと、穂村弘³の修辞のハイブリッド」（瀬戸 2021：100）と評されている。

4. 笹井宏之の短歌における文字体系の選択

本節では、『ひとさらい』269首、『てんとろり』451首、『八月のフルート奏者』395首⁴から「平仮名／ひらがな」という語を含む作品と、短歌全体がひらがなで表記された作品を取り上げる。4.1節では「平仮名／ひらがな」という語が使用された作品からひらがなという文字体系に対する笹井の意識を分析し、4.2節では短歌全体がひらがなで表記された作品に着目することで、笹井の短歌作品におけるひらがなの表現効果を検討する。

² ですます調や、他者への呼びかけといった文体を短歌に導入した。瀬戸は、東の文体を「この二十年間の口語短歌でもっとも影響力が大きかった」（瀬戸 2021：30）と評価している。

³ 会話体を駆使し、1990年代に口語短歌を洗練させた。第一歌集『シンジケート』は、ニューウェーブと呼ばれる口語や記号などの修辞をさらに尖鋭化した作品群を象徴する（『岩波現代短歌辞典』）。

⁴ 『てんとろり』と『八月のフルート奏者』には重複している作品が37首あり、それらを除くと3冊で合計1078首が収録されている。

4.1 短歌作品に見る笙井のひらがなへの意識

歌人の大松達知によると、笙井の短歌の作り方は「人間は悲しい、絶対的に人間の存在はさみしいものだということを感じとて、それを平易な言葉で口語や平仮名など簡単なところから詩にする」(栗木・山田・大松 2011: 129) ものである。笙井のひらがなの使用は、慣習的には漢字やカタカナで表記される語の一部にひらがな表記を選択していることに特徴がある。笙井の短歌作品において、慣習的に漢字で表記される語は、漢字で表記される場合とひらがなで表記される場合があり、表記の搖れが見られる語もある。笙井がカタカナ表記を採用しているのはほとんど外来語と動植物名に限られ、カタカナ表記を慣習とする擬音語、擬態語、音声は基本的にひらがなで表記されている⁵。一方、漢字もしくはひらがな表記が慣習とされる語をカタカナで書く例はほとんど見られず⁶、慣習的な表記と比較したとき、笙井はより多くの語にひらがな表記を使用していると言える。

では、なぜ笙井はひらがな表記を好んで選択したのだろうか。ここでは、「平仮名／ひらがな」という語を含む短歌に着目することで、ひらがなに対する笙井の意識を探りたい。

- (1) ひろゆき、と平仮名めきて呼ぶときの祖母の瞳のいくしき黒
(『八月のフルート奏者』)
- (2) ひぐらしのあらしのなかをゆっくりとわたしはひらがなあしどりで
(『てんとろり』)
- (3) ひらがなであった男が夕立とともに漢字に戻りはじめる
(『てんとろり』)

上の3つの短歌では、「平仮名／ひらがな」が比喩として使用されている。比喩、特にメタファーは人間の認識を反映している (Lakoff and Johnson 1980) ため、これらの短歌を解釈することはひらがなへの笙井の意識を分析するために有効であろう。

(1) は、祖母が呼ぶ自分の名前の音声にひらがなが結びつけられている。「ひろゆき」は詩人自身を表し、詩人は祖母に名前を呼ばれ、その音声を書き表すのであれば漢字やカタカナではなくひらがなになると詠んでいる。「祖母の瞳のいくしき黒」は、祖母の視線には慈愛が込められているという詩人の感覚に基づき、詩人が祖母に愛着を感じていることが分かる表現である。このひらがな表記は、詩人が祖母からの愛情を感じ、また詩人自身も祖母に愛着を抱いていることを示している。つまり (1) の「平仮名めきて」は、対象への愛着がひらがな表記として表れていると考えられる。

(2) の「ひらがなあしどり」というメタファーは、「ゆっくりと」歩くこととひらがなと

⁵ 「秋雨の国見の山を仰ぎつつポンと手の甲へおく手のひら」(『八月のフルート奏者』) では唯一擬音語もしくは擬態語の表記にカタカナが用いられている。

⁶ カタカナ表記の固有名詞を除き、外来語、擬音語、擬態語、音声以外にカタカナが用いられているのは、作歌当時常用外であった「哺」をカタカナで代用した「三階でとてもいいひとになってる主婦のかたちをしたホ乳類」(『ひとつさいらい』) と、独特な話し方をカタカナ表記で強調している「胃の検査やったほうがヨクナイ?と語尾上げる癖で心配されて」(『八月のフルート奏者』) の2首である。

いう文字体系に笛井がなんらかの関連を感じていることによって生まれたものである。大音量のひぐらしの鳴き声のなか「ゆっくりと」歩くことは、地上に出てからの生命が短いひぐらしに思いを馳せる様子を喚起する。作品のなかで「ゆっくりと」時間が流れる様子は、ひらがな表記によって、漢字表記されたときよりも時間をかけて読み手が作品の内容を了解していく体験に重なり、これが「ひらがなのあしどり」というメタファーを成立させていると考えられる。

(3) は、ひらがなと漢字の2つの文字体系が比喩として用いられている。「ひらがなであつた男」が「漢字に戻りはじめる」は、男にとっては「漢字」の状態が通常であり、「ひらがな」の状態が珍しいということを表す。男は夕立によって自身にとって自然な「漢字」の状態を取り戻すが、それは思索や想像にふけっていた男が夕立の雨粒という身体の感覚を喚起する刺激によってはっとさせられ、意識が現実に戻ってきたことのメタファーであると解釈できる。「漢字」の状態が通常の意識の状態であるとすると、それに対する「ひらがな」の状態は、意識が現実から離れている状態である。すると(3)は、明瞭なものを「漢字」、曖昧なものを「ひらがな」と表現していることが分かる。あるいは、「男」を見ている人物が、夕立の音によってそのような認識の変化を感じるに至ったとも考えられる。このとき、夕立の前ははっきりと認識していなかった「男」の輪郭が夕立によって浮き彫りになったという場面が想定され、ここでも曖昧な状態がひらがなと、よりはっきりと認識できる状態が漢字と結びついている。

(2) と(3)には、いずれも「あらし」や「夕立」という雨を指す言葉が使われている。(2)ではひらがな表記でも「あらし」という言葉に込められている激しさは保たれまま、「ひぐらしのあらし」というメタファーが読み手の聴覚を刺激しうるものになっている。(3)では夕立が視覚や触覚に強く訴える様子が、「ひらがな」と「漢字」、つまりを曖昧なものと明瞭なものを区別する働きをしている。以上の「平仮名／ひらがな」の比喩から、笛井にとってのひらがなは愛情や余韻、より抽象的で曖昧な事物や状態といったイメージを喚起する文字体系であると推測できる。

4.2 すべてひらがなで表記された短歌

『ひとさらい』、『てんとろり』、『八月のフルート奏者』には、すべてひらがなで表記された短歌が15首ある。ここではそのすべての短歌を取り上げ、ひらがな表記の詩的な機能を検討する。

- (4) はねとばすばすはねとばすばすはねとばすばすはねとばす
(『ひとさらい』)
- (5) あばら ぼね どろぼう たち の あばら から でて くる ばら ばら の
あばら ぼね⁷ (『てんとろり』)

⁷ 紙面の都合で2行になっているが、実際は1行で書かれた作品である。引用によって行をまたいでいる部分は、「ばら ばら の あばら ぼね」と空白を空けて書かれている。

(4) と (5) は作品全体がひらがなで表記されたことによって、特定の音の繰り返しが視覚的に明示されている。(4) は、「はねとばす」の5音のみで構成された作品である。表語性をもたないひらがな表記によって「跳ね飛ばす」「撥ね飛ばす」「羽飛ばす」「羽とバス」など複数の解釈が生まれる。また句またがりや句割れの可能性を考えると、そもそも「はねとばす」がひとつの区切りになるかどうかも不明瞭であり、語の区切り方によっては「跳ね飛ばすバス跳ね飛ばす跳ね飛ばすバス跳ね飛ばす」のような繰り返しの構造を見ることもできる。限られた音の繰り返しは早口言葉のようなテンポの良さにつながり、一字空けによって語の切れ目を明示しないことも働いて、(4) のひらがな表記はこの作品のことば遊びの側面を強めている。

(5) は、慣習的にはカタカナで表記される「ばらばら」がひらがなで表記され、「あばらぼね」と「ばらばら」が並ぶことで、「あばらぼね」の中にも「ばら」という語が含まれていることが示されている。「ばら」という音の繰り返しが目立って感じられるという韻律の工夫が見られるだけでなく、一字空けによって複数の読み方が可能になっている。例えば、「あばらぼね／どろぼうたちのあばら からでてくるばらばらのあばらぼね」と区切ることができるほか、「あばらぼね／どろぼうたち のあばらからでてくるばら／ばらのあばらぼね」と区切ることで「ばら（薔薇）」のイメージも浮かび上がる。前者の区切り方で現れる名詞は「どろぼう」と「あばら（ぼね）」であり、泥棒が命を失い、その胸を開くとバラバラになったあばら骨が出てくるという情景が立ち上がる。一方、後者では、名詞に薔薇が加わり、泥棒とあばら骨と薔薇を結びつけて解釈することが求められる。直前の(4)は一字空けを用いないことでひらがな表記が複数の解釈をもたらしていたが、(5)は一字空けによって読者を複数の解釈へ誘い、一字空けの有無という異なる表現方法が同じ表現効果を生み出している。

以下の(6)と(7)は、すべてひらがなで表記されていることと、「ことば」が擬人化されていることが共通している。

(6) うしなったことばがひざをまるくして(ことばのひざはまるいんですよ)
(『ひとさらい』)

(7) たましいのやどらなかつたことばにもきちんとおとむらいをだしてやる
(『てんとろり』)

(6) の「うしなったことば」を語り手が「うしなった」ものだとすると、それは語り手が忘れてしまったことばと解釈できる。擬人法とメトニミーを手掛かりにすると、「ひざをまるく」するとは、横から見たとき曲げた膝が丸みを帯びている体育座りの状態である。擬人法が用いられていることから「(ことばのひざはまるいんですよ)」は「うしなったことば」からの語りかけであるという解釈が可能になり、忘れてしまったことばが記憶のどこかで思い出されることを待っているような様子が想起される。作品中に二度使用されている「まる」という文字列に含まれる曲線や結びの丸い形には、「まる」という言葉が意味するところを視覚の面から補強する効果もあると考えられる。

ことばは具体的な言語表現として口に出したり書いたりされることで「たましい」が宿ると考えると、(7) の「たましいのやどらなかつたことば」とは、心に浮かんだものの外に出されることはなかったことばであると捉えられる。(7) における「とむらい」のひらがな表記は、表語性をもつ漢字表記であれば直接的に喚起されていた死の恐ろしさを軽減し、「おとむらい」という語用もあいまってどこか優しさが感じられる。「弔い」という語は、「ひいらぎをあなたの部屋へ置きました とむらうことになれていなくて」(『てんとろり』)、「弔いの声大陸を渡り来て日本国旗の微風となれり」(『八月のフルート奏者』)にも用いられている。前者の作品の「とむらう」は、ひらがな表記によって、弔うという行為にまだ慣れていない、実感や理解が伴っていない様子や、「とむらう」という言葉から暗示される「あなた」の死の受け入れがたさが示されていると解釈しうる。後者の作品の「弔いの声」は、ひらがなより具体的なイメージと結びつく漢字表記が、大陸から日本へ渡るほどの「弔いの声」の力強さを表現している。

(8) ふわふわを、つかんだことのかなしみの あれはおそらくしあわせでした
(『ひとさらい』)

(8) では「かなしみ」や「しあわせ」など感情に関する抽象的な語が用いられ、それらも含めて作品全体がひらがなで表記されている。ここでのひらがな表記は、「ふわふわ」という擬態語のやわらかい印象や、(3) で述べたようなひらがなと抽象概念のつながりを感じさせる。

(8) と同じく「掴む」という動詞が用いられた筮井の作品に「真水から引き上げる手がしっかりと私を掴みまた離すのだ」(『ひとさらい』)があり、この作品では「掴み」と漢字表記が選択されている。「真水から……」を解釈するとき、「引き上げる手」、「しっかりと私を掴み」、「また離す」といった具体的な動作の表現だけでなく、表語性に優れた漢字表記の使用も身体的な感覚の喚起に関わっている。(8) は、「つかんだ」のひらがな表記によって、「掴む」という動詞のメタファーとしての使用が暗示され、さらに作品の比喩性が高まっていると考えられる。

(9) しっとりとつめたいまくらにんげんにうまれたことがあったのだろう
(『ひとさらい』)

枕が「しっとりとつめたい」状態は、枕が湿気や液体を吸収した状態である。湿気を含んだ枕と人間の結びつきとして考えられる根拠のひとつに、語り手が湿気を含んだ枕に人間に触れたときのような質感を見出したことが挙げられる。あるいは擬人法の発想から枕が「しっとりとつめたい」状態を、枕の外の湿気や水分を吸収したのではなく枕がその内部にあった湿気や水分を放出していると捉え、泣いている人間を連想し、「にんげんにうまれたことがあったのだろう」と枕に人間らしさを見出している。ここで枕はただの枕でなく語り手に特別な感覚をもたらしたものであり、語り手の想像がひらがな表記され、表語性によって現実との結びつきを感じさせる漢字に対して表語性に乏しいひらがな表記が現実との距離を保っている。自分では

ない存在に想像を巡らせ、それがひらがな表記で現れているのは、先に挙げた次の作品も同じである。

(2) ひぐらしのあらしのなかをゆっくりとわたしはひらがなのあしどりで
(『てんとろり』) (再掲)

「あらし」と表現されるほどひぐらしの鳴き声が大きい中をゆっくりと歩く様子が「ひらがなのあしどり」というメタファーで表現されている。「足取り」という、直線的で角ばった字形の漢字やカタカナと比較すると、「ひらがなのあしどり」はゆったりとして不規則な歩みであることが含意される。笹井が長く闘病していたことを踏まえると、地上で過ごす時間が地中で過ごす時間よりもずっと短いひぐらしの儂さに自身を重ねていると読むこともできる。ひらがな表記によって「嵐」という語が漢字のもつ表語性を離れてメタファーとして効果的に働くほか、語の切れ目が分かりにくくなり「わたし」のゆっくりとした歩みを読み手が追体験する効果を挙げている。

(10) くさはらでつめとぎあってくちづけた みんなやさしいひとだったっけ
(『ひとさらい』)

「つめとぎあって」という表現は人間ではない動物を想像させるが、下の句には「やさしいひと」とあり、「つめとぎあって」も人間同士による行為であると分かる。爪を研ぐという動物にとって狩りや自衛のための行為や、草原という場所から、「くさはらでつめとぎあってくちづけた」はより動物的で原始的なイメージを抱かせる。「だったっけ」という記憶を振り返ることに関連する表現から、それは現実にあったことなのか、記憶は正しいものなのかという曖昧さが生まれている。ここでのひらがな表記は作品世界の曖昧さと結びつき、読み手により多くのことを想像させる機能をもっている。

(11) ばらばらですきなものばかりありすぎてああいつそぜんぶのみこんでしまいたい
(『ひとさらい』)

(11) で表現されている、好きなものがばらばらにたくさん存在していて、それを飲み込むことで自分の中でひとつものにしてしまいたいという欲求は、非現実的だが切実なものである。
(3) に、漢字表記と現実世界のつながり、そしてひらがなと想像の世界のつながりが現れているように、ひらがな表記は、この願望はあくまでも空想上のものであり現実にはならないと分かっている語り手の態度を暗示しているかもしれない。

(12) どんなひともひかりのはやさたもって　みえたしゅんかんにみえてしまう
(『ひとさらい』)

この作品を文字通りに読むと、「どんな人も光のような速さをもっていて、普段は見ることができないが、目に映った瞬間に見えてしまう」という奇妙な論理展開、および「みえる」の反復が読み手には伝わる。しかし人間が光速で移動することは不可能なことから、「どんなひともひかりのはやさたもって」はメタファーであると解釈できる。このメタファーは、一見まったく同じ状態を保っているように見えて、人間の物理的そして精神的な状態が一定であることはなく、肉眼では捉えられない絶え間ない変化が続いていることを表している。「みえたしゅんかん」は、絶え間ない変化の中で語り手が目にしたある人物の一面であり、語り手はその人物について自分が目にしたごく一部しか知ることはできない。目には見えない感情や人柄についても、人間は場面や相手によって振る舞いを変えることがあるためその人物のすべてを知ることはできず、わずかな情報から心情や人柄を推測せざるを得ない。それを語り手は残念に感じていることが「みえてしまう」というモダリティ表現に表れている。(12) では「ひかりのはやさ」のひらがな表記が比喩としての解釈を要求し、さらに「みえる」のひらがな表記も、視覚的な情報を受け取るだけでなく心情や人柄など肉眼では見えないものを想像するというより抽象的な意味合いを兼ねている。

(13) とうがらしをえらびにゆこう　えた一なりい　えた一なりい　ねえ、えらびにゆこう
(『てんとろり』)

この作品は連作「世界がやさしくあるためのメモ」に収録されている。この一連には 26 首が収められ、それぞれの短歌の前にひとつの英単語が添えられている。(13) は 5 番目の作品であり、アルファベットで 5 番目の e で始まる「excite」が短歌の前に置かれている。「えらびにゆこう」という勧誘の表現から分かるように、語り手は誰かを誘っている。「とうがらし」を漢字で「唐辛子」と表記すると、漢字の表意性によって唐辛子という物体が強くイメージされる。しかしひらがな表記の「とうがらし」は漢字表記ほど唐辛子そのものとの強いつながりをもたず、「excite」と関連づけながら「とうがらし」を比喩として解釈すると、「とうがらし」とは日々に刺激を与えてくれるものである。すると「とうがらしをえらびにゆこう」とは、「ねえ」と呼びかけることができるほど親しい相手との関係性や過ごす時間に変化を生じさせることの提案である。「えた一なりい」は「eternally」のひらがな表記とすると、語り手はその変化によって相手との関係を壊したいわけではなく、むしろ 2 人の関係をより長期的なものにするための変化を求めている。このように解釈すると、この短歌は遠回しな親愛の情あるいは愛情の告白ととることができる。ここでのひらがな表記は比喩的な解釈を喚起し、また「ねえ」という親しみを感じさせる呼びかけとも響きあい、(1) と同様に短歌の中で描く対象への愛着を感じさせる効果をもっている。

(14) ゆきげしき みたい にんげんよにんくらいころしてしまいそうな ゆきげしき
(『てんとろり』)

(14) は、ひらがな表記によって「ゆきげしき みたい」に「雪景色みたい」という直喻と「雪景色が見たい」という願望の表現が重なっている。「にんげんよにんくらいころしてしまいそうな」には、人間を圧倒する雪の様子が描かれている。人間が干渉し制御できないことに自然現象としての雪の恐ろしさがあり、この点では、雪の激しさが人間の命を奪ってしまいそうである、あるいは高く積もった雪がすでに何人かの人間をその下に埋めてしまったようである、という想像が働く。雪は恐ろしいものであるが、それと同時に見たいと思わせるほど人間を魅了するものもある。雪景色を見たいという気持ちが雪の恐ろしさに勝り、雪に近づいたことで命を落としてしまうという場合を考えると、雪が「にんげんよにんくらいころしてしまいそう」でも不思議ではない。そして、何かをそのような雪景色「みたい」だと例えることや、そのような雪景色を「見たい」と望むことは、人間の死をその中に含むため不気味な表現である。笹井にとってのひらがなが優しさや柔らかさを表現するものであることに加え、ひらがな表記は幼い人物像を立ち上がらせる（富樫 2021）効果をもつ。この短歌では、ひらがな表記が喚起する幼さや純粋さと使用されている表現のアンバランスによって、純粋さの中に残酷さがひそんでいるような世界観が表現されている。

(15) これごっぽ ごっぽのみみよ これごっぽ ごっぽのみみよ がかのごっぽの
(『てんとろり』)

(15) は、画家のゴッホが、自身の耳を切ってそれを娼婦に手渡したという場面を想起させる。ひらがな表記がもたらす優しさや柔らかさと、ゴッホが精神病院に収容されることになったエピソード、及びその耳がこの場にあることを執拗に語りかけてくる人物がいるという獵奇的な雰囲気には大きな隔たりがあり、それによってこの語りかけの得体のしれない様子が強められている。このひらがな表記は、語り手にとってこの音声が漢字やカタカナと結びつかず、まだ意味内容の理解に達していないことを表す効果や、ゴッホの精神科収容のエピソードとの関連から、この語りかけの主体の精神錯乱を連想させる効果をもつと考えられる。

(16) ふれられたときになにかをうばわれる ここちよいここちよいおはなし
(『てんとろり』)

一般的に、奪われることにはネガティブな感情が伴うが、この作品では奪われることと心地よさが結びついている。表語性に優れた漢字表記は、「触れる」や「奪う」という動詞の意味するところを具体的に喚起し、身体性やリアリティを生じさせる。ひらがな表記は、漢字のもつ表語性から離れることで特に「奪う」という動詞の暴力的な側面を薄れさせ、本来の「奪う」と

は異なる意味を示唆しうる表記である。緊張のなかに心地よさを感じることがあるように、心地よいという感覚が常にポジティブな感情を伴うわけではないため、たとえ「うばわれる」ことが苦痛であっても心地よさは生じうる。もちろん、語り手にとって「うばわれる」ことがそもそも苦痛でなく「ここちよい」という解釈も可能である。(16) のひらがな表記は、作品の表現内容をより抽象的なものにし、「ここちよい」という感情の複雑な広がりを表している。

(17) どうしてもかなしくなつてしまひます あなたをつつむあめのかをりに
(『八月のフルート奏者』)

(17) は「あなたをつつむあめのかをり」が複数の解釈を許している。雨が現実世界のものだとすると、「あなた」と雨の匂いの結びつきによって語り手の意思にかかわらず悲しみが呼び起されている場面になる。笹井の作品に「誰の雨垂れなのかを確かめるため襖を何枚も破いている」(『ひとさらい』)とあるように、「あめ」は涙や悲しみ、そして「あめのかをり」は悲しみを抱えている人がもつ雰囲気のメタファーであると捉えると、語り手は「あなた」の中に隠された悲しみを敏感に感じ取っている。いずれの解釈においても語り手が「あなた」に対して感じているものが描かれ、表意性をもたないことで多様な解釈を許容するひらがなによって叙情の面が強調される。ここでの全ひらがな表記には、ひらがなはより感情や抽象的なものに結びつくという笹井の意識も反映されていると考えられる。

5. おわりに

本稿では、笹井宏之の短歌作品のうち「平仮名／ひらがな」を含むものとすべてひらがなで表記されたものを取り上げ、ひらがなという文字体系に対する笹井宏之の意識を探り、ひらがながもたらす詩的な機能を検討した。ひらがなは表音文字であり、ひとつひとつの文字が特定の意味をもたないからこそさまざまな解釈を喚起し、それこそがひらがなのもつ詩的な機能であると言える。同じ語の表記ゆれを見ると、同じ語であっても身体性を喚起し現実に結びつくような表現は漢字で表記され、より抽象的で比喩性の高い表現はひらがなによって表記されるという例が観察された。この表記ゆれは、ひらがな表記された表現はその意味するところを読み手が柔軟に解釈できることによると考えられる。笹井の短歌はしばしば「透明」と評される⁸が、それは短歌で表現される笹井の感性の繊細さだけではなく、ひらがなが表語性に乏しく多様な解釈を許容することによる表現効果に基づいている。他の歌人や笹井が影響を受けていたとされる歌人との比較による笹井のひらがなの使用の特徴については稿を改めて論じたい。

⁸ 「強い自分はなくて、透明な自分がいろいろなものになる」(栗木・山田・大松 2011:129)、「基本的に誰の心中にも自然に入っていけるような透明感があり、抽象化されている」(笹井 2013:157-158)、「澄み切った透明な詩世界」(山田 2015:158)など。

参考文献

- 阿辻哲次 (2014) 「漢字とどうつきあうか」、高田智和・横山詔一 [編] 『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』、pp. 12–33、彩流社。
- 江戸雪 (2020) 「平仮名の無意味のちから」、『歌壇』第34卷第4号、p. 44、本阿弥書店。
- 金水敏 (2021) 「近・現代小説の片仮名の用法一斑—村上春樹『海辺のカ夫カ』を中心に」、加藤重弘・岡墻裕剛 [編] 『日本語文字論の挑戦—表記・文字・文献を考えるための17章』、pp. 26–58、勉誠出版。
- 栗木京子、山田富士郎、大松達知 (2011) 「作品季評〈第79回・前半〉由良琢郎「シシュフォスの坂」 永田紅「釣り糸を垂れて」 笹井宏之歌集『てんとろり』」『短歌研究』第68卷第7号、pp. 120–133、短歌研究社。
- 笹井宏之 (2011) 『ひとさらい』、書肆侃侃房。
- (2011) 『てんとろり』、書肆侃侃房。
- (2013) 『八月のフルート奏者』、書肆侃侃房。
- 瀬戸夏子 (2021) 『はつなみずうみ分光器』、左右社。
- 富樫純一 (2021) 「役割語の先へ—役割語的表現への広がり—」、『日本語学』第40卷第1号、pp. 26–36、明治書院。
- 野村剛史 (2019) 『日本語の焦点 日本語「標準形」の歴史 話し言葉・書き言葉・表記』、講談社。
- 浜田康敬 (1981) 「文字の使い方 漢字・カタカナ・ひらがな」、『短歌研究』第38卷第8号、pp. 32–34、短歌研究社。
- 松田結貴 (2021) 「日本語の文字とポップカルチャー—文字が表現する多言語性について—」、『日本語学』第40卷第1号、pp. 102–111、明治書院。
- 山田航 [編著] (2015) 『桜前線開花宣言』、左右社。
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press. (渡辺昇一ほか訳 (1986) 『レトリックと人生』、大修館書店。)

辞典

- 岡井隆 [監修] (1999) 『岩波現代短歌辞典』、岩波書店。

参考資料

- 文化庁「国語施策・日本語教育 内閣告示・内閣訓令」bunka.go.jp (最終閲覧 2025年5月7日)